

(卒業研究中間報告)

## 芭蕉がみちのくの旅に求めたもの

森 竹 順 子

芭蕉が「奥の細道」の旅に出たのは元禄二年四十六歳の春であり、その前年の八月に、関西方面の長い旅と「更科紀行」の旅から帰ったばかりである。芭蕉は一体どんな気持ちで「奥の細道」の旅に出たのだろうか。

芭蕉は、元禄二年正月十七日付の兄半左衛門宛書簡に其元旧年御仕舞日、御不自由ニ可有御坐候。此方も永く旅がへり何やかや取重、毎日く客もてあつかひなどニ而、冬のしまひもはつくニ御坐候間、金子少も得進じ不申候。

と書いている。十か月ぶりの長旅から帰ったばかりの芭蕉は、「何やかや取重、毎日く客もてあつかひなど」江戸の知友門人たちは歓迎し、次々に訪問の客があり、俳諧の会合が多かったようである。

しかし、尚白宛の元禄元年十二月五日付書簡にみられる此冬は物むつかしく句も不出候。

という文面や、猿轡(推定)宛の元禄二年閏正月乃至二月

初旬筆の書簡に、

尚々再会のいのちも哉とねがひ申事に候。去年の秋より心にかゝりておもふ事のみ多ゆへ、却而御無きたに成行候。

と書いていることから、誰にも言いたくない、あるいは、言っても理解されそうにもない「心にかゝりておもふ事」があったようである。その「心にかゝりておもふ事」とは、一体何であったのか、芭蕉が自分の俳諧の停滞を自覚し、新しい文学世界の開拓ということに苦しんでいたのではないであろうか。あるいは、いかにして新たな俳風の展開を計るか、それを芭蕉は次の旅に求めていたのではないだろうか。ここでは、芭蕉が「奥の細道」に求めた思いが何であったかを考えてみることにしたい。

そこでまず、この「奥の細道」の旅に出発する直前、具体的には元禄二年正月から、「奥の細道」の旅への出発までの間に書かれた芭蕉書簡の中で、旅にかかわる部分を挙

げてみたい。

○嵐蘭宛書簡

御手紙忝、御内室様より沢庵漬一器送被<sub>レ</sub>下、毎度之便り毎御心付られ、御礼難<sub>レ</sub>尽事ニ奉<sub>レ</sub>存候。先日御帰已後風も静ニ成候而、一入御残多存候。されども暫時得<sub>二</sub>閑語一大望不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之晴候。且昨日搭山子へ参候。貴様御事は不定ニ御坐候へバ又重而催し可<sub>レ</sub>申候間とて、昨日参候処、来月の御非番も皆あの方と相たがひ候。一日番日御指替候へバ、三番の刻皆逢申よしニ御坐候。いかゝなるべき御事ニ御坐候哉。何とぞ御出合願申事ニ御坐候以上  
(元禄二年閏正月廿六日付)

○半左衛門宛

何とぞ北国下向之節立寄候而成、関あたりより成とも通路いたし、し<sub>ミ</sub>可<sub>二</sub>申上候。別条無<sub>レ</sub>之内、細<sub>く</sub>書状ニも及不<sub>レ</sub>申候間、左様ニ御意得可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候。  
(元禄二年正月十七日付)

○猿難(推定)宛

去秋は越人といふしれもの木曾路を伴ひ、棧のあやうきいのち、姨捨のなぐさみがたき折、きぬた・引板の音、し<sub>し</sub>を追すたか、あはれも見つくして、御事のみ心におもひ出候。とし明ても猶旅の心ちやまず

元日は田毎の月こそ恋しけれ はせを

弥生に至り、待佗候塩竈の桜、松島の朧月、あさかのぬまのかつみふくころより北の国にめぐり、秋の初、冬ま

では、みの・おはりへ出候。(中略) 去年たびより魚類肴味口に払捨、一鉢境界乞食の身こそたうとけれとうたひに佗し貴僧の跡もなつかしく、猶ことしのたびはやつし<sub>く</sub>てこもかふるべき心がけて御坐候。其上能道づれ、堅固の修業、道の風雅の乞食尋出し、隣庵に朝夕かたり候而、此僧にさそはれことしもわらぢにてとしをくらし可<sub>レ</sub>申と、うれしくたのもしく、あたゝかになるを待佗て居申候。

一、宗無老御無事に御坐候哉。何角に付ておもひ被<sub>レ</sub>出候。尚々江戸御下被<sub>レ</sub>成候は、節句過には拙者は発足仕候間、それまでに候は、懸<sub>二</sub>御目一度候。以上  
(元禄二年閏正月乃至二月初旬筆)

○桐葉宛

拙者三月節句過早々松嶋の朧月見にとおもひ立候。白川・塩竈の桜御浦やましかるべく候。欄木良医師一伝奉<sub>レ</sub>頼候。山台より北へ立寄申事も可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御坐一候。もはや其元より御状被<sub>レ</sub>遣まじく候。

(元禄二年二月十五日付)

○惣七・宗無宛書簡

又能因法師西行上人のきびすの痛みおもひ知んと、松嶋の月の朧なるうち、塩竈の桜ちらぬ先にと、そ<sub>ろ</sub>にいそがしく候。うき世の人の大としも我桜待日におなじからむ。(中略) 短冊百枚、是がつゑたる日五銭と代なす物か、筆箱一 雨用迄ござ 鉢のこ 柱杖是二色乞食の

支度 ひの木笠茶の羽織、如<sup>レ</sup>例

(元禄二年二月十六日附)

以上のような書簡を「奥の細道」の旅に対する芭蕉の意図を表明したものと考へることができよう。

また、杉風自筆の懐紙と伝えるものの中にも、芭蕉の「奥の細道」の旅とのかかわりをみることができよう。

○杉風懐紙

翁陸奥の歌枕見む事をおもひ立侍りて日比住ける芭蕉庵の庵を先破り捨しばらく茶庵に移り侍る程猶其筋余寒ありて白川のたよりに告こす人もありければ多病心もとなしとて弥生末つかたままで引とめて

花の陰我草の戸や旅はじめ

杉風

これらの書簡や消息の中から、芭蕉の「奥の細道」の目的、動機といったものについて従来の先学の研究をたどりながら考へてみたい。

「奥の細道」の冒頭部分に、

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず、そぞろ神の物につきて心をくるはせ道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず

という一節がみられる。ここでは「漂泊の思ひ」を満たすのが困難な旅を思いたたせた根本の動機であるとし、杜甫、李白、西行、宗祇など、いわゆる「古人」が漂泊を続けて旅に死んだことに思いを馳せたり、芭蕉はこの年四十六才となり、世間的な声望におぼれて安閑としていることがで

きなかつたこと、漂泊の思いが芭蕉の心をいらだたせたこと、安易な生活を捨てて苦難の道を選ぼうとする詩人の宿命であったことなどが、旅の動機のひとつであるとされている。

また、奥州地方には古来歌によまれた名所が多く、先行文学特に能因、西行、宗祇を慕う芭蕉が、歌枕や旧蹟を探ることをめざしたとして、風国の「泊船集」(元禄十一年刊)にも、

先師芭蕉翁出て奥のはてまで西行、宗祇の足あとをしたひありき給ひて

と「奥の細道」の旅と西行、宗祇私淑の念のかかわりを挙げているが、この西行、宗祇らの足跡のしのばれる奥州の歌枕や名所、旧蹟をさぐることに、その主要な目的であったとして、芭蕉が「奥の細道」の旅を通して、ひろく名所、旧蹟を訪ね、歴史や文学の故事縁起に心を傾け、自然をただ自然として見るのではなく、陸奥のきびしい自然にそこに生きるさまざまの人々との関わりをみつめ、自然に通して古人の心にふれ、古人の風雅を自身の体験の中で芭蕉自ら素朴な自然を愛し、歴史的意味をもつ自然に心を注いだとの見解も従来言われて来たところである。

さらに、未知の自然へのあこがれが芭蕉を旅にかりたてたとし、「奥の細道」の「春立てるかすみの空に白河の関越えんと」とか、「松嶋の月先心にかかりて」といったことばは、未知の自然へのあこがれが、芭蕉を旅にかりた

せたとする考えもある。芭蕉にとって、「野ざらし紀行」

「鹿島紀行」「笈の小文」など紀行文を残した旅はいくつかあり、それぞれの旅が芭蕉に意味のある旅であったには相違ないが、それらの旅は知人門友のある地、故郷近くへの旅であったのに対して、この「奥の細道」の旅は、未知の世界への旅であったわけである。この点からすれば、

ことし元禄二とせにや 奥羽長途の行脚、只かりそめに  
思ひたちて呉天に白髪の恨を重ぬといへ共、耳にふれて  
いまだ目に見ぬさかひ

といった本文中のことは、「耳にふれていまだ目に見ぬさかひ」すなわち作品の上でしか知らず実際には未知の世界への旅立ちであったわけである。

その他にも、

もし生きてかへらばと、定めなき頼みの禾をかけ

・ 羈旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路に死なん是天の命なり

などの「奥の細道」の本文中のことは、古人がそうであったように、死を覚悟してでも旅を通して素朴な自然、風雅の実体に直接接すること、自らの体験によって新しい風物を自らの目によって確かめ、それによって自分で古人の心をさぐり、詩心の形成をめざし、風雅の大道をうちたて「貫道」するものを自己の中で確認しようとしたものである。芭蕉俳諧の一つの頂点を示す「猿蓑」がこの「奥の細道」の旅のあとで編集されたことから、新しい文学世界

への意図があったとみることができないのではないだろうか。54

こう眺めてみると、芭蕉の西行、宗祇、能因などへの敬慕が、それらの人々の体験した世界を、旅を通して肉体と精神両面によって追体験し、中世歌人の心に自らの心を一体化しようとする試みであったとみることが出来る。

ここで、その一人西行についてみると、芭蕉が心のふるさととして、常に憧憬しつづけていたことは、「奥の細道」に先だって「笈の小文」には、

西行の和歌における 宗祇の連歌における 利休の茶における 雪舟の絵における その貫道するものは一なりとあり、「柴門の辞」にも

たゞ釈阿西行のことばのみ かりそめにいひ散れしあだなるたはぶれごとくも哀れなる処おほし

ということばをみせ、西行私淑の心の厚さとその言行への共感を知ることが出来る。

そして、芭蕉の実際の旅をみると、「野ざらし紀行」の時、吉野山に西行庵の跡を訪ねている。西行庵は非常に急な坂、困難な山道の奥にあり、物見遊山といった軽い気持ちで訪れることのできる場所ではない。それだけに深い尊敬の心、あこがれの気持ちがなくは、訪れるはずはないと思われる。

また「奥の細道」のなかでは、遊行の柳を訪れて、

田一枚植えて立ち去る柳かな 芭蕉

の句を残し、象潟では

象潟の桜は波に埋もれて花の上こぐ蟹の釣舟

の歌をとりあげている。さらに汐越の松では、「夜もすがら」の歌を引いて西行を慕っている。

環境や生活の場の変化が、創作活動の基本的条件を変化させることは、芭蕉のみの問題ではなく、われわれ現代人の場合も同様であろう。が、芭蕉の場合、その仏教的な人生観、世界観が、天和三年歳晩の大火、類焼を契機として、無所住の心を生み出したものと思われる。しかも、芭蕉の俳諧世界は、その自然の摂理への目が根幹となっている。その意味でみちのくや北陸の風土は、芭蕉にはげしい創作の動機を与えたにちがいないと思われる。

さらに、芭蕉の紀行文への意欲も旅への動機とみることができようと思う。芭蕉の生涯での代表的な紀行文は

- ・「野ざらし紀行」 貞享元年～二年、芭蕉四十一歳。
  - ・「鹿島紀行」 貞享四年 芭蕉四十四歳
  - ・「笈の小文」 貞享四年～五年 芭蕉四十四歳～四十五歳
  - ・「更科紀行」 貞享五年 芭蕉四十五歳
  - ・「奥の細道」 元禄二年 芭蕉四十六歳
- である。

しかし「鹿島紀行」「更科紀行」は、旅程も短時間であり、紀行文としても、十分配慮されたものではない。また、最初の紀行文「野ざらし紀行」や第三番めの「笈の小文」では、芭蕉の意気ごみや旅への意欲はよく表れているものの、作品そのものとしては、構成や文章も十分整っていない。

いし、表現も必ずしも意識され考慮されたものとは言えないように思われる。それが、「奥の細道」にいたって完成されてゆくわけである。「奥の細道」は、内容、形式ともに整序され、その用語や文体も十分推敲が加えられ、元禄二年九月の旅の終了から、素龍に稿本を手渡したとみられる元禄七年春まで、五年近くにわたって芭蕉の手元において、推敲され、手を入れられて、完璧な形に仕立て上げられたわけである。しかもそこには老熟した芭蕉の心が反映され、筆致にも円熟した俳諧的な味わいをみることができ。その意味で、文学としての紀行文の理想的な姿を「奥の細道」に見ることができるといえる。

芭蕉は、「笈の小文」の中で

抑々道の記といふものは 紀氏 長明 阿仏の尼の 文をふるひ情を尽してより 余はみな倂似かよひて その糟粕を改むることあたはず まして浅智短才の筆に及ぶべくもあらず その日は雨降り 昼より晴れて そこに松ありかしこに何といふ川流れたりなどといふこと 誰々もいふべく覚え侍れども 黄奇蘇新のたぐひにあらず ばいふことなかれ されどもその所どころの風景心に残り 山館旅亭のくるしき愁も かつは話の種となり 風雲の便りとも思ひなして 忘れぬところどころ 跡や先やと書き集め侍るぞ なほ酔へる者の妄語にひとしく 寝ねる人の謔言するたぐひに見なして 人また妄聴せよと述べている。

芭蕉は、代表的紀行文として「土佐日記」「東関紀行」「十六夜日記」などをすぐれた作品として評価し、一方自らを「浅智短才」として「及ぶべくもあらず」としながらも、「その所どころの風景心に残り、山館野亭のくるしき愁も かつは話の種となり 風雲の便りとも思ひなして 忘れぬところどころ 跡や先やと書き集め侍る」ということばにみられるように、紀行文について異常とも思われるこだわりと意欲を その心の中に混在させていたことを知ることができる。

確かに当時の俳人たち、なかんづく談林の人々によって多くの旅の記が書かれている。一、二例を挙げてみても、「陸奥塩竈一見記」（宗因）、「誹枕」（幽山）、「一目玉鉾」（西鶴）、「日本行脚文集」（三千風）など、みちのくにかわりのあるものも多いようである。

これらの人々は、諸国を行脚して、名所、旧蹟を巡歴し、いわゆる名所記として残しているわけである。近世の俳人たちにとっては、旅と旅の記がひとつの必要な体験と考えられていたとも思われる。

そうした状況の中であって、芭蕉の場合は、貞門、談林の俳人としての行き方に同調肯定した時代もあり、先行俳人のそうした流行をみて、黙過することができず、自らを旅にかりたてたという側面もあったように思われる。

また、

新古ふた道にふみまよふといへども みちしるべする人

しなければと わりなき一卷残しぬ このたびの風雅宴  
に至れり

という「奥の細道」の本文からも、芭蕉の旅へのひとつの意欲を推測することができる。「笈の小文」では、

今宵よき宿借らん 草鞋のわが足に宜しきを求めんとばかりはいささかの思ひなり 時に気を転じ日々に惜をあらたむ もしわづかに風雅ある人に出合ひたる悦び限りなし

と述べている。それは芭蕉が、よい宿、風雅ある人とのめぐり合いを常に願望しつづけていたことを示すものであり、そんな意味では、「奥の細道」の旅は、文化的にはいまだ未開拓の地であったみちのく、北陸に、風雅の新しい同好の士を求めての旅でもあった。

先にも触れたように「更科紀行」以前の旅は、東海道、中山道から伊勢、難波、近江そして故郷伊賀への旅であり、門人や知己との風交を重ねる旅であった。これに対してみちのくへの旅は、未知の世界、知人も乏しく、しかも「前途三千里のおもひ」に示される、長く遠い僻遠の地への旅であった。

このように考えてくると、以上述べてきたような、いくつかの旅への動機、目的といったものの中で、「奥の細道」の動機が、これらの中のいずれが中心であり、重い意味をもっていたかということ断定することは困難である。し

かし、全体としては、以上に触れてきたようなことが、その場所や人との対応の中で、微妙にからみ合いながら、結局これらのすべてが、芭蕉の心の中に旅への願い、旅への目的として、常に意識され反芻されていたと考えることがむしろ芭蕉の旅を考える上にもっとも自然ではないだろうか。

## 選評

芭蕉が旅を通して何を求め、何を得たかという問題は、従来さまざまな角度から追求検討されてきたところであり、旅と紀行文とのかかわりについても先行研究は多い。

森竹さんが、それらを踏まえながら、自分で資料を確かめつつ、芭蕉の旅を自分なりに考えようとする姿勢は貴重であると思う。

卒業研究の途中での、しかも部分としての一節であるため、若干論理の飛躍や資料の読み解きの甘さがあるのは止むを得ないが、こうした地道な努力の積み重ねの上に、自分の論を組み立ててほしいと思う。

(小瀬・記)